

「東日本大震災アーカイブ」基盤構築プロジェクト

第3回ラウンドテーブル 議事要旨

- 1 日時 平成25年3月25日(月) 16:00~18:00
- 2 場所 三菱総合研究所 4階 大会議室
- 3 出席者(敬称略):
 - (1) 構成員
岩崎構成員、岡本構成員、高野 構成員(座長)、長坂構成員、松崎構成員
 - (2) 運用実証事業者・ポータル開発事業者
青木部長(凸版印刷)、岩田課長代理(NTT データ)
 - (3) オブザーバ
 - ①総務省
高橋情報流通振興課長、白石課長補佐
 - ②国立国会図書館
大場電子情報流通課長、河合次世代システム開発研究室長
 - (4) 事務局(三菱総合研究所)
前田
- 4 議事内容
 - (ア) 開催にあたって
 - (イ) 東日本大震災アーカイブ基盤構築プロジェクトの状況
 - (ウ) 運用実証事業結果について
 - (エ) 各ワーキングの結果の報告と指摘事項への対応について
 - (オ) ガイドライン案について
 - (カ) その他
- 5 議事
 - 【議題1:開催にあたって】
 - 総務省高橋課長及び国立国会図書館河合室長より、ラウンドテーブル開催にあたっての挨拶があった。
 - 【議題2:東日本大震災アーカイブ基盤構築プロジェクトの状況】
 - 事務局より、資料①「東日本大震災アーカイブ」ソフトウェアの開発状況を説明。
 - 【議題3:運用実証事業結果について】
 - 凸版印刷より、資料②「運用実証事業報告書」を説明。

主な意見は以下の通り。

 - 構成員(長坂構成員)
地元が主体的に構築するアーカイブを支援するという視点がもう少しあるとよいのではないかと、また後年運用のスキームについてももう少し練り上げてほしい。後年運用に市が参加する計画となっているが、どこまで合意されているのだろうか。いずれにしても、

収集したコンテンツについて、地域の中で活用される環境を提供していかなければ、メタデータも豊かにならず利活用されないのではないかと。被災地のためのアーカイブ、被災地がどう運用できるかということを検討しなければならないのではないかと。

○ 構成員（高野座長）

技術 WG においては、後年運用の継続性が議論になった。事業結果の保持のためバックアップについて、きちんと検討する、人が変わりやすい大学が後継団体としてふさわしいのか、本事業に参加した人だけが後継団体となるのではなく、より広い団体と連携すること、河北新報は有料コンテンツを保持しているが、それが事業継続につながるのか検討してほしいという意見があった。

○ 構成員（松崎構成員）

利活用 WG では、誰が主体となって運営するか、地元のメディアが事業として行うというものと、自治体や図書館、地域人材センター等の地元の方が、自分のためにアーカイブを活用すべきではないかという話が議論になった。

○ 構成員（高野座長）

このような活動が地域で継続されるために、具体的な案があれば伺いたい。

○ 構成員（岡本構成員）

各アーカイブにおいて、検索エンジンに拾われている件数が少ない等、使い勝手にやや難があるのではないかと。また、利活用という点で他の web システムとのシームレスな連携が重用であり、連携できるということをシステム要件にした方がよい。1日にアクセス数が30万件程度ないと、事業として行うのは難しい。また、APIの仕組みが提供されデータを二次的に利活用できる可能性が高まったが、それを促進する催しが必要ではないか。例えばハッカソンによるスマートフォンアプリの構築等、地元の自治体と連携した定期的なイベントを開催していく必要があるのではないかと。地元の方に役立つものは何かということ、ヒアリングを行った上で実施する必要がある。また、良い事例が生まれた場合には積極的に表彰していくような仕組みがあると、利活用に対する意識が高まる。

○ 構成員（長坂構成員）

被災地で使えるシステムが必要ではないか。例えば、我々は被災地で語り部の方の支援のためのシステムを作っている。また、石巻においてはアーカイブセンターを作り、防災環境の拠点として、維持管理される仕組みを考えている。いずれにせよ被災地の支援になることが重要ではないか。連携に係る敷居を下げる必要があるのではないかと。

○ 構成員（高野座長）

情報を集めるということが目的であったわけではなく、収集と新しい利活用の可能性を開き、それを通じてもっと集めたいというようなことがあるとよい。今回の実証報告では、活用が抜け落ちている。活用されない限り、こういった事業は継続されないのではないかと。

○ 構成員（松崎構成員）

利活用 WG の中で出た意見に、アーカイブを見て感性に訴え、こう使いたいというアイデアが利用者側に生まれるような形にしたかったという話が出たが、今回の事業において阪神・中越でできなかったプラットフォームを用意できたので、スタートラインに立てたのが良かった点ではないか。例えば復興の街づくり協議会において、今回のアーカイブのコンテンツが地域の意思決定のための参考資料になるとよい。今後我々もどのように利活用するのか、継続して検討する必要があるのではないかと考えている。アーカイブを中心とした震災文化が生まれ、それが記録されるとよいのではないかと。また、使われるようにするために皆さんに呼びかけていくことが大事である。神戸の場合は地域人材センターの中で過去の写真を収集しているが、その活動の中で同窓会が開催され

るようになり、その中でアーカイブのコンテンツへコメントをいただけたりする可能性がある。そういった広がり期待できるため、今回の活動の継続も含めてPRしていけるとよいのではないかと。

○ 構成員（岩崎構成員）

今日の報告の中では、それぞれのプロジェクトとひなぎくの関係性が分かりづらいのではないかと。NHKスペシャルの大震災関連のシリーズの中で話題になったのが、ビッグデータの回であった。発災時、何が起きたか分からないという状況の中で、SNSやツイッターなどの膨大なソーシャルメディアのデータがどのように活かされたかを分析していくプロセスを取り上げたところ、感動や知的好奇心が刺激されたという評価や、災害を具体的な形で読み取ることにつながった、という評価があった。そういう意味では、データを保存したことの意味はあると考えている。その保存された大量のコンテンツから、「意味を読み取る」ということが、今後重要になってくるのではないかと。被災地の方に見せていただいた写真の中で、橋があって橋げたに車が引っかかっているという写真があった。どういう意味があると思いますかという質問に対して、私は目に見える情報を述べたが、実は、車の中やがれきの中から200数十名の遺体があったとの回答であった。そういった情報がコンテンツに対して保存されることが、重要ではないかと感じた。また今後の課題として、東日本大震災のアーカイブに係るプロジェクトにおいては、2つの空白があったと感じている。1点は福島、もう1点は首都圏である。福島に関しては放射能による規制のため、取材ができなかった。首都圏に関しては、亡くなった方は少ないが大変な災害であったことは間違いなく、何が起きたのかを収集して意味づけする作業は大きな意味があるとNHK東日本大震災アーカイブスでは感じている。我々は今後も収集したいと考えている。

○ 構成員（長坂構成員）

地理空間情報は、単に写真の背景地図というだけでなく、さまざまなデータを重ね合わせることでより意味のある分析が可能となるきわめて重要な情報であるため、収集をお願いしたい。

○ 構成員（岩崎構成員）

今回の事業はビッグデータの研究者が、いいネタだと思っていただけるよう育てるべきである。

○ 構成員（長坂構成員）

ひなぎくの位置づけがはっきり見えない。ポータルでありながら、連携等のポリシーが自治体には伝わっていないため、活用するためのメッセージや仕組み等を用意していただきたい。

○ 構成員（岩崎構成員）

国立国会図書館は、情報学の専門家が集まった組織であるので、デジタルキュレーターをどう支援していくのかという部分において、主体的に次のステップへ踏み出された方が、ひなぎくの位置づけが分かりやすくなるのではないかと。

○ 構成員（高野座長）

その点に関しては、国立国会図書館だけでの対応は難しいかもしれないが、外部の方の力を活用して実施されるのがよいのではないかと。例えば、時空間情報は重要な情報であり、それをインデックスしておけば、将来語り部がいなくても伝わるような仕組みが構築されるのではないかと。

○ 構成員（松崎構成員）

震災関連資料について、時空間情報がないため整理する段階で地籍図等を使用して場所の特定ができず、写真を集めて場所を推定することしかできないため、整理に時間がかかっている。応援する自治体にとっても、業務に使えるため時空間情報があるとうれ

しいのではないか。

○ 構成員（高野座長）

技術 WG の中で、アーカイブを維持するには、それ自体をミッションとする組織が必要との意見があったが、自治体にとってアーカイブの意義が明確になれば、アーカイブが業務の中できとんと位置づけられる。

○ 構成員（長坂構成員）

メタデータについて、利活用するために撮影した位置と被写体の位置が異なるケース等の実証実験があってもよかったのではないか。またオーラルヒストリーの記録については、震災前及び震災後のプロフィール等も管理されており、検索できるとよいのではないか。コンテンツ提供者や権利関係等の事務関係のメタデータという視点が足りなかったのではないか。

【議題 4：各ワーキングの結果の報告と指摘事項への対応について】

- 高野技術ワーキング座長及び松崎利活用ワーキング座長からのワーキングの結果報告については、議事の中で随時ご説明いただいた。

【議題 5：ガイドライン案について】

- 事務局より、資料③「ガイドライン案一式」（はじめに～第 4 章まで）を説明。

主な意見、質疑応答は以下の通り。

○ 構成員（長坂構成員）

汚れた資料等が残っているので、それらについて記載いただけるとよい。

○ 構成員（長坂構成員）

変形サイズの資料や大判のポスターや 16mm フィルムが多数あるが、デジタル化する際に業者に依頼する際の紹介先や、どのようなスキャナを使えばよいということが記載されているとよい。あるいは参考資料が添付されている形でもよい。

○ 事務局（前田）

運用実証でも苦労されており、ホッチキス留めの資料や、模造紙等への対応はガイドラインに記載されている。

○ 構成員（岡本構成員）

デジタル化については最初の敷居を高くしないことが大事であり、あまり難しくしないのがよいのではないか。情報があればあっただけよいが、デジタル化されているだけでもよかったと考えるのがよいのではないか。

○ 構成員（高野座長）

技術 WG でも同様の話があり、アーカイブ活動を始めてみようと思えるガイドラインにした方がよい、という話があった。

○ 構成員（松崎構成員）

利活用 WG でも同様の話があり、ある程度修正されたとは思われるが、専門家であっても素人であってもガイドラインを使えるよう、アイデアを提供する必要があるのではないか。

○ 構成員（高野座長）

その観点からすると今回追加された「本ガイドラインの読み方」が冒頭にあると、読

者からすると、少し難しい印象をもつのではないか。WGでの指摘は、ここだけ読めば問題ない、というような簡単なものを想定していた。そのため付録としてはいかが。

- 構成員（岡本構成員）

今までのデジタルアーカイブの手引き本は難しく書かれすぎていると感じている。ある程度現状のガイドラインを読んだ上で、より体系的に理解を深める資料とするのがよいのではないか。最低限ここだけ知っていれば後悔しないというものが、記載されているとよい。
- 構成員（松崎構成員）

図表等で概要版が示されているとよい。
- 構成員（長坂構成員）

現場の感覚では、被災資料の応急措置を行う方と、デジタルデータを保存する方は異なるので、どこに重きを置くかで記載の順番が変わってくるのではないか。被災資料の応急措置を行える方は専門の方が対応するという感覚であり、我々はアウトソーシングを前提にしたマニュアルを作成している。
- 構成員（高野座長）

本ガイドラインは消えてしまう可能性のある資料を、どう救うかのためのガイドラインであり、現場でまさに生まれるデジタルデータをどう保存するかというガイドラインも必要ではあったかもしれない。
- 構成員（岩崎構成員）

誰を読者とするのか。今までは、国や県の方が読まれると想定して話を伺っていた。今の議論を踏まえると、アーカイブにそもそも何で記録を残さなければならないのか、何で急がなければならないのかということが記載されていない。また被災地で苦しんでいるときに、アーカイブの構築に取り組んでいてよいのかと悩まれる方がいるはずであるが、そうではなくて記録しておくことが将来的にも役立つことがあるということを、記載する必要が出てくるが、現場の方を対象とした場合は、今の記載も必要になるのではないか。
- 構成員（長坂構成員）

現場ではクイックマニュアルが必要とされている。
- 構成員（高野座長）

次のステップとして、このガイドラインも、読者の声を踏まえてブラッシュアップされるとよいのではないか。
- 構成員（長坂構成員）

現場では担当者を決めるところから、他の県での事例を知りたがっているところである。
- 事務局より、資料③「ガイドライン案一式」(第5～第7章まで)を説明。
- 構成員（松崎構成員）

我々が作成した震災に関する本があるのだが、この情報をどうすればよいのかという点について、ひなぎくとの連携の絵が頭にあるとさらに分かりやすいのではないか。提供者側はありがたい。
- 構成員（長坂構成員）

報告とガイドラインは分けた方がよいのではないか。
- 構成員（長坂構成員）

共通的なメタデータの項目が前面にあったうえで、ローカル毎に定めるタグの提案があるとよい。それらが検索のキーワードとなることや、検索されたキーワードのログ等を保存しておくといったことが書かれているのがよいのではないかと。

○ 構成員（高野座長）

ガイドラインとしてはこのような記載として、他にそういった利用方法を提唱できる活動が行われると良いのではないかと。

○ 構成員（岡本構成員）

ひなぎくとの連携は重要であると考えている。APIで公開するという事は、自分たちのアーカイブのコンテンツが、全く異なる形で公開されることがありえることを、理解してもらう記載が必要ではないかと。どういうメタデータが必要なのかは各プロジェクトでの考えがあると思うので、どんな形であれ情報を残しておくことが重要であるため、ある程度自由な記述も受け付けられるようにしておくことが必要ではないかと。

○ 構成員（岩崎構成委員）

メディアとしてはそれぞれが独自の視点でアーカイブを構築しているが、今回アーカイブを構築してみて、他のアーカイブと連携させることの重要性を感じさせられた。これを見た方が自分なりにアノテーションやノートをつけているが、逆に自分達が考えていたこととはまったく別の視点でタグをつけることが起こりえると思うが、それをコンテンツプロバイダにどう還流するかというのが面白いテーマになると思う。またモチベーションにもつながる。

○ 構成員（長坂構成委員）

我々のシステムにおいても陸前高田市が公開したコンテンツに、別の都市計画学会が専門家のタグ付けをしており、それをもとに自分達だけで利用することも可能だし、拡張タグとして検索することも可能である。そのような活動が増えると豊かな情報となるのではないかと。

○ 構成員（松崎構成委員）

今回の事業は将来必ず役に立つので、活用の仕方に気がついた機関や団体と連携していただくとよいのではないかと。ようやくメディアや自治体が活用するための1ステップが、できてきたのではないかと。

○ 構成員（高野座長）

さらなる別のコミュニティが構築されるとよいのではないかと。

【議題6：その他】

○ 利活用WGにおいてメーリングリストを継続したいという話があり、技術WGにおいてそのお話をしたところ、一緒に参加したいというお話があったため、一緒に検討させていただきたい。また利活用においてハッカソン・アイデアソンの実施や、ガイドラインのWeb化というご提案も頂いている。ぜひご協力いただきたい。

○ 構成員（高野座長）

ガイドラインについて、今後の修正等については座長一任としていただく。

○ 事務局（前田）

第2回ラウンドテーブル議事録は配布したもので、公開させていただく。

以 上